

28年11月研修会  
「聖徳太子と秦河勝」

(秦氏の事績を訪ねる・広隆寺、蚕ノ社、松尾神社)

資 料

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ  
(11月15日(火))

## 行程表

紅葉のシーズンに当たり、大幅にスケジュールが遅れた時には、一部の目的地を省略しますので、ご了承下さい。

8 : 15 近鉄西大寺駅南口 集合

(生駒交通貸切バスです)

8 : 30 近鉄西大寺駅 出発

10 : 10 木島神社 (三本足の鳥居)

10 : 40 広隆寺 (国宝・弥勒菩薩 ほか)

拝観料 (個人負担 : 700円)

徒歩で蛇塚古墳を往復 (片道 : 約15分)

11 : 55 蛇塚古墳

12 : 15 広隆寺駐車場

12 : 30 梅宮大社 (昼食)

13 : 25 松尾大社 (お酒の神様)

13 : 45 法輪寺 (十三参のお寺)

14 : 25 渡月橋 (大堰関、紅葉の嵐山 ほか)

徒歩で保津峡下り舟付き場付近まで散策

14 : 55 渡月橋 出発

交通渋滞が予想されるので、15時を目処に出発

17 : 00 近鉄西大寺駅 帰着 (解散)

## 歴史 11月15日 「聖徳太子と秦 河勝」

(秦氏の事績を訪ねる・広隆寺、蚕ノ社、松尾神社)

(出典：①井上満郎「秦河勝」、②大和岩雄「秦氏の研究」、③ウィキペディア)

はた かわかつ  
秦 河勝

### (秦氏について)

秦氏は新羅系渡来人で、(古事記) 秦氏の渡来は、漢氏と合わせて、応神朝としているが、実際は、(日本書紀) 雄略朝に同様の記載があり、5世紀後半とされる。

嵯峨野には、他地区と異なり、古墳時代末期の6世紀に、巨大な前方後円墳が築造されており、何れもこの地を支配していた秦氏首長の墓とされる。(別図参照)

葛野大堰は秦氏の建設したものとされ、朝鮮半島からもたらされた新しい土木・灌漑技術によるものであろう。桂川左岸の荒蕪地であった嵯峨野に、灌漑用水を引き入れたものである。

「太秦」の表記は、天平14年(742)に秦下島麻呂が「太秦公」姓を賜ったのが初見である。

渡来人の渡来時期には、大きな4回の波がある。

①紀元前300年ころ、②4世紀末から5世紀の初め、③5世紀の後半から6世紀の初め、④7世紀後半とされる。

秦氏の渡来は、5世紀後半とされるが、朝鮮半島が高句麗の勢力拡大により、秦氏の故郷・新羅は戦乱に巻き込まれていた。

漢氏と秦氏は同時期に渡来したが、漢氏は頭脳的氏族として政治に深く関与し、秦氏は殖産的氏族として活躍した。東漢氏は飛鳥に近い檜隈を拠点とした。

仏教伝来は欽明13年(552)であるが、それ以前に秦氏などの渡来人が民間伝来として仏教を信仰していたものと推定される。

秦氏とカモ氏(賀茂氏、鴨氏)の関係については、鴨氏人が秦氏の婿となっているが、どちらが先に京都に住み着いたかは諸説がある。秦氏と鴨氏の結びつきから、秦氏が深く神祇に関与していた事が理解出来る。

### (秦河勝について)

秦氏のルーツは秦の始皇帝ともいう。アメノヒホコとの関係も無視できない。

河勝は秦氏の族長的人物であったとされる。

河勝は、飛鳥時代の人物で(推定も含め、562~647)、姓は造。秦丹照または秦国勝の子とする系図がある。

山城国葛野の出身。聖徳太子の側近として活躍した。また、富裕な商人でもあり朝廷の財政に関わっていたといわれ、その財力により平安京の造成(平安遷都の時、河勝の邸宅を帝都の敷地として寄付し、この地は大内裏となったとされる)、伊勢神宮の創建などに関わったという説もある。河勝の時代には、秦氏の勢力は一層大きくなっていた。

用明天皇 2 年（587 年）に発生した丁未の乱では、物部守屋の追討戦に従軍し、厩戸皇子を守護しつつ守屋の首を斬ったという。（『上宮聖徳太子伝補闕記』）

推古天皇 11 年（603 年）、聖徳太子より弥勒菩薩半跏思惟像を賜り、蜂岡寺（現在の広隆寺）を建てそれを安置した。

河勝は太子死後の皇極 3 年（644 年）、蘇我入鹿の迫害を避けて海路をたどって坂越に移り、没したのは赤穂の坂越とされる。神域の生島には秦河勝の墓があり、この坂越湾に面して秦河勝を祭神とする大避神社が鎮座している。

秦河勝の史料への登場は少なく、  
推古 10 年（603）に聖徳太子から仏像を下賜される。  
推古 15 年（607）聖徳太子が馬子と共に神祇を行う、  
推古 18 年（610）新羅使節の接待、

これを最後に史上から姿を消す。この時期は、聖徳太子が馬子との政権闘争に敗れ、事実上の引退状況にあった。河勝は太子の側近であったので、同様に引退状況にあったと推定される。それから 30 数年後に、

皇極 3 年（644）大生部多（おおふべのおお）の打倒事件で登場する。

大生部多は富士川辺りで、常世の神を布教した。

虫を「常世の神」として祭ると、財産と長寿を手に入れることが出来る。

この「虫」は橘の樹等に生る緑色のイモムシで、アゲハチョウの幼虫に似ている。

（いわば新興宗教みたいなものであるが、国家の宗教方針に反していた）

何故、河勝が打倒事件に駆り出されたか。大生部は秦氏の配下であり、秦氏の長である河勝が、国家の分裂を招き兼ねない「新興宗教」を抑えに行かざるを得なかったとみるべきであろう。これは、秦氏と鴨氏の結びつきから、秦氏が深く神祇に関与していた為と推定される。河勝は、この数年後に没している。（大化 3 年：647）

### （秦氏とアメノヒホコの関連）

アメノヒホコ（天之日矛：古事記、天日槍：日本書紀）は、新羅より来て、長門（山口県）→播磨宍粟（兵庫県）→淡路島出浅 →難波 →宇治川（京都・滋賀）→蒲生（滋賀）→若狭（福井）→但馬出石（兵庫）を遍歴したとされている。これは新羅系渡来人・秦氏の分布地区であった。（垂仁 3 年に新羅の王：天日槍が帰来した）

特に、播磨宍粟は秦氏の濃密な居住地であり、揖保川、千種川の上流に当たる。河口付近の坂越は河勝が晩年を送り、墓所（生島）も存在している。

古事記、日本書紀、風土記などから、アメノヒホコの関係地として、対馬、肥前、筑前、筑後、豊前、豊後、長門、周防、出雲、播磨、淡路、攝津、山城、近江、若狭、但馬、紀伊、大和が指摘される。この地は何れも秦氏の分布が濃密である。

大酒神社（大裂、大避など）は、秦氏の祖神で、サケは地を裂くサクと想定される。

広隆寺の境内（現在は東隣）、赤穂市坂越にあり、赤穂郡には 28 社が確認されている。

井上の推論は、先に秦氏の居住地があり、それらを綴り合わせて、アメノヒホコの遍歴地は創作されたとしている。

### (松尾大社と伏見稻荷大社の関係)

秦氏族の本拠地は右京の太秦で、深草の秦氏族は分家である。(太秦の秦氏族、松尾大社を祀った秦都理の弟が、稲荷社を祀った秦伊呂具とされる。)

太秦の秦氏族は、記録の上では大宝元年(701)桂川畔にそびえる松尾山に松尾神を奉鎮、深草の秦氏族は、和銅4年(711)稲荷山三ヶ峰の平らな処に稲荷神を奉鎮した。

### 松尾大社 (大社HPなどより)

京都市西部、四条通西端に位置し、東端の八坂神社(祇園社)と対峙して鎮座する。元来は松尾山(標高223メートル)に残る磐座での祭祀に始まるとされ、大宝元年(701年)に文武天皇の勅命を賜った秦忌寸都理(はたのいみきとり)が勧請して社殿を設けたといわれる。

その後も秦氏の氏神として奉斎され、平安京遷都後は東の賀茂神社(賀茂別雷神社・賀茂御祖神社)と共に「東の厳神、西の猛霊」と並び称され、西の王城鎮護社に位置づけられた。中世以降は酒の神としても信仰され、現在においても醸造家からの信仰の篤い神社である。

境内は、神体の松尾山の麓に位置する。本殿は室町時代の造営で、全国でも類例の少ない両流造であり国の重要文化財に指定されている。また多くの神像を有することでも知られ、男神像2軀・女神像1軀の計3軀が国の重要文化財に、ほか16軀が京都府指定有形文化財に指定されている。そのほか、神使を亀とすることでも知られる。

御祭神“<sup>おおやまくいのかみ</sup>大山咋神”は、太古の昔よりこの地方一帯に住んでいた住民が、松尾山の山霊を頂上に近い大杉谷の上部の磐座(いわくら)に祀って、生活の守護神として尊崇したのが始まりと伝えられている。

(註:<sup>おおやまくいのかみ</sup>大山咋神は、大山に杭を打つ神、すなわち山の地主神であり、また、農耕(治水)を司る神とされる。古事記では、近江国の日枝山(後の比叡山)および葛野(現京都市)の松尾に鎮座するとある。「日枝山」には日吉大社が、松尾には松尾大社がある。)

伝説によると、「大山咋神は丹波国が湖であった大昔、住民の要望により保津峡を開き、その土を積まれたのが亀山・荒子山(あらしやま)となった。そのおかげで丹波国では湖の水が流れ出て沃野ができ、山城国では保津川の流れて荒野が潤うに至った。そこでこの神は山城・丹波の開発につとめられた神である。」

#### [<sup>おおいせき</sup>大堰と用水路]

秦氏は保津峡を開削し、桂川に堤防を築き、今の「渡月橋」のやや少し上流には大きな堰(せき=大堰→大井と言う起源)を作り、その下流にも所々に水を堰き止めて、そこから水路を走らせ、桂川兩岸の荒野を農耕地へと開発して行ったと伝えられている。

#### [酒造神]

農業が進むと次第に他の諸産業も興り、絹織物なども盛んに作られるようになった。酒造については秦一族の特技とされ、室町時代末期以降、松尾大社が「日本第一酒造神」と仰がれるようになった。

## 広隆寺

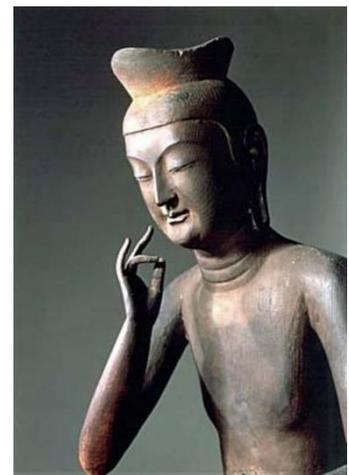
広隆寺は、京都市右京区太秦にある寺。宗派は真言宗系単立。山号を蜂岡山と称する。蜂岡寺、秦公寺、太秦寺などの別称があり、地名を冠して太秦広隆寺とも呼ばれる。帰化人系の氏族である秦氏の氏寺であり、平安京遷都以前から存在した、京都最古の寺院である。国宝の弥勒菩薩半跏像を蔵することで知られ、聖徳太子信仰の寺でもある。毎年10月12日に行われる牛祭は、京都三大奇祭として知られる

『書紀』によれば、推古天皇11年（603年）、秦河勝が聖徳太子から仏像を譲り受け、「蜂岡寺」を建てたという。一方、承和5年（838年）成立の『広隆寺縁起』（承和縁起）や寛平2年（890年）頃成立の『広隆寺資財交替実録帳』冒頭の縁起には、広隆寺は推古天皇30年（622年）、同年に死去した聖徳太子の供養のために建立されたとある。『書紀』と『広隆寺縁起』とでは創建年に関して20年近い開きがある。

蜂岡寺の創建当初の所在地について、確証はないが、7世紀前半の遺物を出土する京都市北区北野上白梅町の北野廃寺跡が広隆寺（蜂岡寺）の旧地であり、平安京遷都と同時期に現在地の太秦へ移転（ないし2寺が合併）したとする説が有力である。

広隆寺には「宝冠弥勒」「宝髻（ほうけい）弥勒」と通称する2体の弥勒菩薩半跏像があるが、ともに国宝に指定されており、前者が国宝第1号である。

楼門を入り、参道を進むと右手に講堂（重要文化財）、左手に薬師堂、能楽堂、地蔵堂（平安時代の地蔵菩薩坐像を安置）などがある。参道正面には本堂にあたる上宮王院太子殿があり、その手前右手に太秦殿（秦河勝を祀る）、左手（西）には書院、北側には霊宝殿と旧霊宝殿がある。このほか、書院の西方、奥まったところには桂宮院本堂（国宝）がある。



講堂（重要文化財）：正面5間、側面4間、寄棟造、本瓦葺き、平安建築。

本尊阿弥陀如来坐像（国宝）、右に地蔵菩薩坐像（重要文化財）、左に虚空蔵菩薩坐像（重要文化財）を安置する。拝観は堂外からのみ。

桂宮院本堂（国宝）：法隆寺夢殿と同じ八角円堂である。本尊の聖徳太子半跏像（鎌倉時代、重要文化財）は霊宝殿に移されている。建物は原則として非公開。

霊宝殿：仏像を中心とした広隆寺の文化財を収蔵展示する施設で、国宝の弥勒菩薩像2体、十二神将像などはここに安置されている。西隣の旧霊宝殿は、非公開。

薬師堂：木造薬師如来立像（平安時代前期）を安置する。通常の薬師如来像と異なり、女神の吉祥天像のような像容に造られた吉祥薬師像である。

## 木嶋神社（蚕ノ社）

木嶋坐天照御魂神社（このしまにますあまてるみたまじんじゃ）は、京都市右京区太秦にあり、かつての広隆寺の最東端に位置する。

通称は「木嶋神社（木島神社）」や「蚕かいこの社やしろ」とも呼ばれている。古くから祈雨の神として信仰された神社であり、境内には珍しい三柱鳥居があることで知られる。また、「蚕かいこの社」と呼ばれる養蚕神社が、撰社として祀られている。

木嶋社の地には元々尾張氏系の人々がいて天照御魂神を奉斎していたが、秦氏の渡来・開拓とともにその在地系祭祀が継承されたとされる。

境内の元もと糺ただすの池に三柱鳥居があり、この池は禊ぎを行なう場所だったとのこと。土用の丑の日にこの池に手足を浸すと、諸病にかからないという俗信仰がある。

（幼少の頃、私もやりました。下見に行ったところ、水が濁れておりガッカリ）

## 三柱鳥居（大和岩雄『秦氏の研究』より）

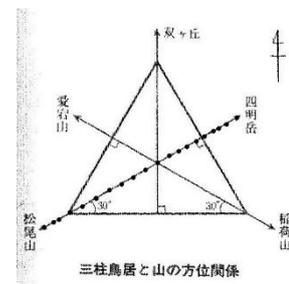
わが国唯一のものといわれる。現在のものは、享保年間（1716～36）に修復されたものである。

佐伯好郎は、景教との関連を指摘しているが、疑問がある。

- 1・三角を重ねた印が、ユダヤのシンボルマーク：ダビデの星
- 2・大酒神社・大辟神社で、ダビデは「大避」と書かれる。

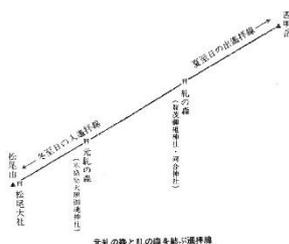
式内社調査報告によれば鳥居の中心点に組石の神座があり、三方から遙拝が出来るようになっている。三柱を結ぶ三角形の頂点の内、2点は松尾神社、稻荷神社を指している。

稻荷神社には夏至の日の出が昇り、松尾神社には冬至の日の入りが沈む。もう一点は双ヶ丘で、頂上には双ヶ丘1号墳がある。



（この古墳は、太秦の蛇塚古墳、天塚古墳と並んで、巨大な玄室を持ち、何れも6世紀後半から7世紀の築造で、秦氏所縁のものと推定されている。）

## 元糺の池について



糺＝タダスは下鴨神社の森の呼称として有名であるが、「ただすのみや」（新古今集）と呼ばれたのは河合神社である。ただし、鴨川と高野川の合流する只洲＝ただすの意であると見られる。元糺といわれる木嶋坐天照御魂神社も河合の地にある。

（江戸時代の「都名所図会」では、木嶋坐天照御魂神社は川の中に立っている）

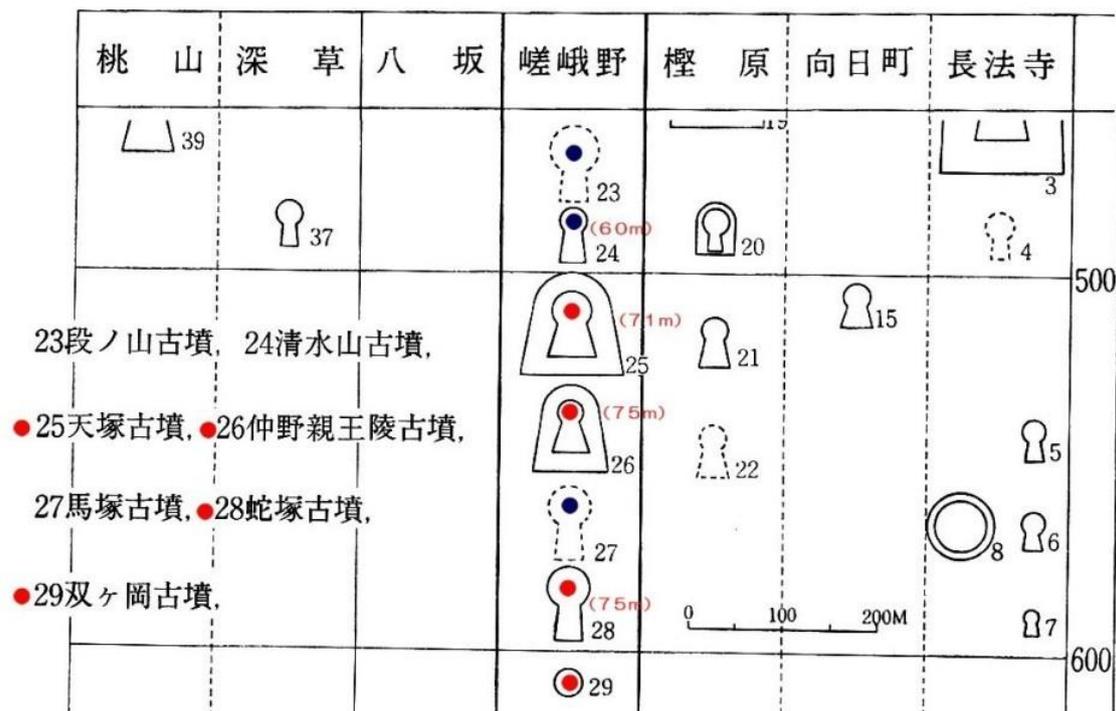
また、大山咋神を祀る日枝神社（比叡山・四明岳）、松尾大社（松尾山）と河合神社（糺の森）、蚕ノ社（元糺）の4社が、遙拝線（夏至の日の出と冬至の日の入り）に並ぶ。

## 蛇塚古墳

蛇塚古墳は、京都府京都市右京区太秦にある古墳。形状は前方後円墳。国の史跡に指定されている。京都府で最大の横穴式石室を有する前方後円墳であったが、墳丘封土は失われ、現在は露出した石室のみを残している。

古墳時代後期の6世紀末から7世紀初頭頃の築造と推定される。墳形は前方後円形で、前方部を南西方に向け、墳丘長は約75メートルである。墳丘は失われたが、現在では、後円部の埋葬施設として巨石を用いて築かれた横穴式石室を露出する。この石室は南東方に開口し、全長17.8メートルを測り、石舞台古墳にも匹敵する規模になる。石室内には家形石棺があったと伝わる。

嵯峨野地域では天塚古墳（約71メートル、国の史跡）・清水山古墳（約60メートル、非現存）・垂箕山古墳（仲野親王墓古墳、約75メートル）・蛇塚古墳などの前方後円墳を中心とする6世紀以降の後期古墳が分布するが、これらは嵯峨野一帯を開発した渡来系氏族の秦氏の活動に関係すると見られ、主な古墳は秦氏の首長墓と推測されている。



(24：清水山古墳と、25：天塚古墳は、どちらも私の生家の近くです)

## 梅宮大社

京都市西部の梅津の地に鎮座する、四姓（源平藤橘）の1つ橘氏の氏社として知られる神社である。元々は奈良時代に南方の綴喜郡井手町付近に創祀されたといわれ、のち平安時代前期に橘嘉智子（檀林皇后）によって現在地に遷座したとされる。

現在地への遷座に関わった橘嘉智子は、嵯峨天皇（第52代）の皇后として仁明天皇（第54代）を出産し、外戚としての橘氏の中興に貢献した人物である。

本殿の東側には「またげ石」と称される2個の丸石があるが、これを跨げば子が授かるとして信仰されている。また本殿の西側には「影向石（ようごうせき）」と称される3個の石があるが、これらは熊野から飛来したカラス3羽が石と化したものと伝える。そのほか境内の東側から北側にかけては神苑が整備されており、四季折々の植物が植えられている。

（大社では、何も説明がありませんが、秦氏関連の神社とされている。）



「またげ石」



「影向石（ようごうせき）」

## 法輪寺

真言宗五教団の京都本山で、和銅六年（713年）、元明天皇の勅願により行基が創建した。天長六年（829年）に、弘法大師（空海）の弟子・道昌が中興して、虚空蔵菩薩を安置し、貞観十六年（874年）には伽藍が整えられ、寺号を「葛井寺」から「法輪寺」に改めた。

\*法輪寺の中興、道昌（798～875）も俗姓は秦氏、ただし、出身は讃岐国香河郡。卒伝によると、承和年中（834～47）大堰川洪水のとき、詔あって道昌自ら衆人に率先して堰堤を修造したので、まさに行基菩薩の再来といわれたという（『三代実録』貞観17年2月9日条）。

平安時代には清少納言の「枕草子」の「寺は」の段において、代表的な寺院としてあげられるなど、多数の参詣で隆盛した。

その後、応仁の乱や蛤御門の変で兵火を受けたが、その都度再興した。

本尊虚空蔵菩薩は、「嵯峨の虚空蔵さん」として親しまれ、智恵と福德を授かるため、数えの十三歳の男女が全国から「十三参り」に訪れる。

以上

## 参加者名簿

敬称：略 アイウエオ順

	氏名	備考
No. 1	青木 幸子	
No. 2	青木 芳一	
No. 3	阿部 和生	
No. 4	池田 敬二郎	
No. 5	池田 富子	
No. 6	上西 千代子	
No. 7	川井 秀夫	代表・世話人
No. 8	川勝 孝雄	
No. 9	川口 達夫	
No. 10	岸谷 和代	
No. 11	田矢 恵三	
No. 12	辻本 愛子	
No. 13	辻本 信一	
No. 14	富井 忠雄	
No. 15	中井 弘	
No. 16	中川 徹	
No. 17	西谷 範子	
No. 18	羽尻 嵩	
No. 19	坂東 久平	世話人
No. 20	坂東 由紀子	
No. 21	福田 美伸	
No. 22	古川 祐司	事務局・世話人
No. 23	森 英雄	
No. 24	八木 順一	
No. 25	山中 笙子	
No. 26	山本 美智子	
No. 27	弓場 厚次	